

# ビジネスで日中友好の輪を広げたい

～ 記者から経営者へ — 立場(視点)を変えておもうこと ～

インタビュー vol.11

## 坂元鋼材株式会社 代表取締役 坂元 正三さん



坂元社長

1993年、天安門事件の記憶もまだ新しい中国に大学卒業と同時に留学。帰国後新聞記者を経て家業を承継した坂元鋼材株式会社の坂元正三さん。めざましい経済発展を目前にしていた中国で学び、そして経営者として再び中国を訪れた今、何を感ぜまた何を学んでおられるのか。会社を訪ね、お話を聞きました。

### ■うらしま太郎になったような気持ちだった

坂元さんの2年弱の留学先は吉林省長春市にある吉林大学でした。当時の長春はまだ貧しく、日本が統治していたころの面影をくっきりと残した街並だったと言います。留学生活では中国や韓国の友人と過ごし、言葉や文化そして彼らの気質も学んだそうです。そして留学から22年後の一昨年、日中経済交流研究会仲間3人で長春を訪れました。

長春駅から市内に向かう道中の新しい町並み、高速道路、きらびやかなネオンサイン。モノクロ写真のようであった留学当時の貧しかった街の変化に衝撃を覚え、まるで「うらしま太郎」になったような気持ちになったそうです。

### ■『現場にいる社長』から『経営をする社長』になる きっかけをくれた『訪中団』

坂元さんが日中経済交流会の訪中団で中国を再訪したのは7年前。この訪中団への参加が坂元さんの「仕事」を大きく変えました。「当時は日々現場での作業に追われる毎日で、経営者らしい仕事はほとんどしていませんでした。かつての留学先の中国に行きたいという気持ちはありましたが、会社を1日も休むことはできないと考えていました」。しかし思い切って参加を決意。その後も訪中団への参加を習慣化することで「自分が留守でも会社が回る仕組み」を徐々に構築。その結果、自分の仕事や時間の使い方も変わり、「経営」(=社長でしかない仕事)を意識し、経営者として自分は何をすべきかを考え、行動が変わっていったそうです。

### ■経営者は今の中国の姿を「自分の眼」で観るべき

坂元さんは、まだ中国と取引をしていない経営者もぜひ訪中団に参加してほしいと言います。「訪中団に参加して目にしたのは、観光ツアーやニュースでは決して見ることができない

真の『今』の中国の姿でした。ローカル工場や日系工場で働く中国人や日本人や、現地の会社経営者たちから生の声を聞くことができます。また、中国やアジアへ進出しておられるベテラン日本人経営者の方々とも親密に話ができ、さまざまなことを吸収できます。自分のビジネスに直接は関係なかったとしても、中国は世界経済の中でも非常に大きな影響力を持つ国。その中国を自分の眼で確かめることは、経営者として非常に重要なことです。訪中団は外部に委託したパックツアーではなく、私たち会員の手作り。こんな素晴らしい学びの場はありません」と語られます。

坂元さんは経営者になる前は「ペンの力で日中の友好を実現したい」と考え、ジャーナリストの道を選びました。しかし今後はビジネスの力で中国やアジアとの友好・交流の和を広げたいと考えるようになったと言われています。「まだまだ道半ばですが、今後も訪中団や日中経済交流研究会で学んだことを日々の経営に生かしていきたいと考えています」

**坂元さんに大きな刺激を与えた訪中団は今年も行われます。**

**期間は9/21から9/26までの6日間。**

**訪問先：西安 / 問い合わせ先：事務局 泉谷まで**



訪問時、留学当時の中国の友人と再会

取材：インタビュー 日中経済交流研究会：広報委員会  
 大山武久(大山印刷株式会社)、野村明宏(株式会社電研社)、  
 山岡和美(株式会社リバーフィールド)  
 まとめ：合田 耕作(株式会社ギャレークルー)